

“伝統的な言語文化”の掘み直し (下)
—『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に—

竹村 信治

*本稿は、平成二十三年一〇月に高知大学で開催された第二二一回全国大学国語教育学会第一日パネルディスカッション「伝統的な言語文化の学習指導を考える—国文学・漢文学・日本語研究者の立場から—」(二十九日午後三時一〇分〜五時二五分)において発表した内容の詳細で、「“伝統的な言語文化”の掘み直し(上)」(『国語教育研究』53号二〇一二年三月)の続稿である。なお、本論文中の枠内記事は同学会「研究発表要旨集」に掲載の本文。また、成稿に際し、論旨を明確にするため発表では時間の関係で割愛した内容、質疑での発言などを加えて、若干の補足を行った。

*

二「言語文化」

「言語文化」は、「文化としての言語」「文化的な言語生活」「多様な言語芸術や芸能」などを「幅広く指」す(『小学校・解説』『中学校・解説』2. 2. 2(4)、『高校・解説』1. 2)。そしてその「特質」は「我が国の言語文化の独自の性格やその価値のこと」だという(『高校・解説』2. 1. 3)。分かり易い解説だが、この、諸表象を文化

(言説)共同体の言表群として束ねようとする議論に欠落しているのは、表象生成の現場への眼差しである。それぞれの表象は、むしろ言説共同体との拮抗をその生成過程にもつ。しかも、表象主体(わたし)が語っているのは、その語りの現在(いま・ここ)における拮抗の最中での世界との対話の、個別的なあり様である。

竹取物語は伊勢物語に代表される“好き者”言説をパロディ化し、源氏物語は“女の物語”(玉上琢弥)としてこれを批評するが(雨夜の品定め、末摘花物語、空蝉物語)、ともに新たな男女関係観、また生の哲学を手に入れてはいない。今昔物語集は天竺・震旦・本朝仏法部に仏教言説を語りつつこれを裏切る現実をも世俗部に記録して、宙ぶりのままで。隠者は草庵の栄華に安住できず、よしなし事を書き付けてはあやしくこそ物狂ほしくなるばかり。能は仏教による救済をもって閉じるが、描いているのは救われない情念の具体だろう。

そこにあるのは「我が国の言語文化の特質」としての「ものの見方、考え方」ではなく、「ものを見る」「考える」その営みの具体的個別的な局面である。とすれば、「言語文化」は言語をもってした世界との対話のアーカイブスと読み替えることができる。国家、

歴史、社会、自然、生、存在、性、心、愛、欲、言葉……。古典テキストはそれらの問題領域をめぐる対話の一端を今に伝える。この言語アーカイブスを教材化し、学習指導を構想することはできないか。そうした個別の対話過程を主題化することこそが、流通する諸言説に取り巻かれながら世界との対話を個別に重ねている学習者にとって必要なことなのではないか。

テキストがいずれかの／いくつかの言説共同体との拮抗をその生成過程にもち、その語りの現在(いま・ここ)における世界との対話の個別的なあり様を伝えていることは、あらためて述べるまでもないことである(É・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』一九六六年、邦訳一九八三年)。それは、私たちの日常の発話を振り返るだけでも明らかなことだ。古典として残されているテキストはどれをとってもその痕跡を留めているが、ここでは、小中村義象他編『中学国文』(吉川半七、一八九六年。第九冊第五課「源頼信頼義馬盗人を射殺す」)以来、教材として長い歴史を持つている『今昔物語集』『馬盗人』(巻二五第12話)を取り上げておく。

「馬盗人」は戦後の民主的文化運動の中で、新しい時代を拓いた民衆(武士階級)の生態を生き生きと活写した珠玉の一編としてあらためて光のあてられた説話である(長野春一「平安朝の行動文学」『国語と国文学』一九四八年六月、など)。『今昔物語集』自体も、文体(和漢混淆文)の先駆性と相俟って、「中世の幕開け」を時代に先だって示したものと評されたが(石母田正『中世的世界の形成』一九五七年、など)、本話はそうした作品像の象徴として戦後教科書にも採録された。旧日本古典文学全集(小学館)の当該話解説には次のような論評が寄せられている。

一話の圧巻は、後半、頼信父子が前後して雨中に馬盗人を急追し、逢坂山で射殺して馬を奪い返した段で、**元筆**をはぶいた叙述の妙は、洗練された描写の局限を見る思いがする。不言不語の間に**完全な意志の疎通をみた頼信父子の一体的行動は驚嘆に値し、その相互信頼と日常的鍛錬のほどをうかがうに足るが、視覚を変えれば、東洋的、日本的意識の特質とされる以心伝心の妙を典型的な形で具現化した話ともいえそうである。**

実線傍線部は語りをめぐる評、波線傍線部は出来事をめぐる評。両者をあわせて文体と時代の新展開、あるいは底流する民族の「伝統」が指摘されている。しかし『今昔物語集』『源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語(源頼信朝臣の男頼義、馬盗人を射殺したる語(こと))』の語りの実際は、この論評とはいささか異なる趣を呈している。「元筆をはぶいた叙述の妙」「洗練された描写の局限」とは、たとえば次のような場合をいうのではないだろうか(平仮名は補読)。

今は昔、河内前司源頼信朝臣ト云ふ兵有りキ。東ニ吉(よ)キ馬持ちタリト聞きケル者ノ許(もと)ニ、此の頼信朝臣乞ひニ遣(やり)タリケレバ、馬ノ主、難辞(いなびがた)クテ其の馬ヲ上(のぼ)セケルニ、道ニシテ馬盗人有りテ、此ノ馬ヲ見テ、**A**蜜(ひそか)ニ付キテ上リケルニ、此ノ馬ニ付キテ上ル兵共ノ緩(たゆ)ム事ノ無カリケレバ、盗人、道ノ間ニテハ否(え)不取(とらず)シテ、京マデ付キテ盗人上リニケリ。馬ハ将(あ)て上リニケレバ、頼信朝臣ノ厩ニ立テツ。

而(しか)ル間、頼信朝臣ノ子頼義ニ、「我ガ祖(おや)ノ許(もと)ニ東ヨリ今日吉(よ)キ馬将(あ)て上リニケリ」ト、人告げケレバ、**B**祖ノ家ニ行ク。

雨極(いみじ)ク降りケレドモ、**C**雨ニモ不障(さはらず)、夕

方ゾ行きタリケルニ、祖、子ニ云ハク、「何(な)ド久シクハ不見(みえざ)リツルゾ」ナド云ヒケレバ、次(つい)デニ、**D・E**「東ヨリ馬将(ゐ)て来タリト聞きツルヲ、我レハ未ダ不見(みず)。遣(おこせ)タル者ハ、吉(よ)キ馬トゾ云ヒタル。今夜ハ暗クテ何トモ不見(みえじ)。朝(つとめて)見テ、心ニ付カバ速カニ取レ」ト云ヒケレバ、頼義、**F**「然(さ)ラバ今夜ハ御宿直仕リテ、朝(つとめて)見給ヘム」ト云ヒテ留リニケリ。宵ノ程ハ物語ナドシテ、夜深更(ふけ)ヌレバ、祖モ寝所ニ入りテ寝ニケリ。頼義モ傍(かたはら)ニ寄りテ寄り臥シケリ。

然(しか)ル間、雨ノ音不止(やまず)ニ降ル。夜半(よなか)許(ばかり)ニ、雨ノ交(まぎ)レニ馬盗人入り来たりテ、此ノ馬ヲ取りテ、引き出でテ去(い)ヌ。其ノ時ニ、厩ノ方二人、音(こゑ)ヲ挙げテ叫びテ云はク、「夜前将(ゐ)て参りタル御馬ヲ、盗人取りテ罷(まか)リヌ」ト。頼信此ノ音ヲ髯(ほの)カニ聞きテ、**G**起きケルママニ、衣ヲ引き、壺折リテ、胡箆(やなぐひ)ヲ掻き負ヒテ、厩ニ走り行きテ、自ラ馬ヲ引き出だシテ、賤(あやし)ノ鞍ノ有リケルヲ置きテ、其レニ乗りテ只独リ関山様(さま)ニ追ヒテ行ク。**H**亦(た)頼義モ、其ノ音ヲ聞きテ、**I・J**未ダ装束モ不解(と)カデ丸寝(まろね)ニテ有リケレバ、起きケルママニ、祖ノ如クニ胡箆ヲ掻き負ヒテ、厩ナル**(欠字)**関山様(さま)ニ只独リ追ヒテ行クナリ。**K**走ラセツツ行きケル程ニ、河原過ぎニケレバ、雨モ止ミ空モ晴レニケレバ、弥(いよいよ)ヨ走ラセテ追ヒ行く程ニ、関山ニ行キ懸カリヌ。

此ノ盗人ハ、其ノ盗みタル馬ニ乗りテ、**L**関山ノ喬(そば)ニ水ニテ有ル所、痛クモ不走(はしらせず)シテ、水ヲツフツフト歩バシテ行きケルニ、頼信此レヲ聞きテ、**M**「射ヨ、彼レヤ」ト

云ヒケル**N**ニ、弓音スナリ。尻(しり)答(え)ヘヌト聞クニ合はセテ、馬ノ走りテ行ク鑑(あぶみ)ノ、人モ不乗(のらぬ)音ニテカラカラト聞えケレバ、亦(た)頼信ガ云はク、「盗人ハ既ニ射落シテケリ。速(すみやか)ニ末ニ走ラセ会ヒテ、馬ヲ取りテ来ヨ」ト許(ばかり)云ヒ懸けて、**O**其(そこ)ヨリ返リケレバ、頼義ハ末ニ走ラセ会ヒテ、馬ヲ取りテ返リケルニ、郎等共ハ此ノ事ヲ聞き付けテ、一二人(ひとりふたり)ツツソ道ニ来たり会ヒニケル。京ノ家ニ返リ着キケレバ、二三十人ニ成リニケリ。頼信、家ニ返リ着キテ、**P**未ダ不明(あけぬ)程ナレバ、本ノ様ニ亦(た)這ヒ入りテ寝ニケリ。頼義モ、取り返シタル馬ヲバ郎等ニ打ち預けて寝ニケリ。

其の後、夜明ケテ、頼信出デテ、頼義ヲ呼びテ、**Q**「其ノ馬引き出でヨ」ト云ヒケレバ、引き出でタリ。頼義見ルニ、実(まこと)ニ吉(よ)キ馬ニテ有リケレバ、「然(さ)ハ給ハリナム」トテ、取りテケリ。但シ**R**吉キ鞍置きテゾ取らせタリケル(トナム語リ伝ヘタルトヤ)。**S****T**

右は『今昔物語集』本文の物語部分からA～Sを、そしていわゆる話末評Tを抜いたものである。A～Sは「登場人物の心中思惟」(I)、「事情解説」(II)の部分である。それぞれを示せば次のごとくである。

I 登場人物の心中思惟(「ト思テ」類)

A 極(きは)メテ欲シク思ヒケレバ、「構ヘテ盗ママ」ト思ヒテ、B 頼義ガ思ハク、「其ノ馬由(よし)無カラム人ニ被乞取(こひとられ)ナムトス。不然(しからぬ)前(さき)ニ我レ行きテ見テ、実(まこと)ニ吉(よ)キ馬ナラバ我レ乞ヒ取りテム」ト思ヒテ、

C 此ノ馬ノ恋シカリケレバ、

D 「此レハ此ノ馬將て来ヌト聞きテ、此レ乞ハムト思ヒテ来タル
ナメリ」ト思ヒケレバ、

F 不乞(こはぬ)前ニ此ク云へバ、「喜(うれ)シ」ト思ヒテ、
H 心ハ、「此ノ盗人ハ、東ノ者ノ、此ノ吉キ馬ヲ見テ取ラムトテ

付きテ来ケルガ、道ノ間ニテ否(え)不取(とらず)シテ、京
ニ来たりテ、此(かか)ル雨ノ交(まぎ)レニ取りテ去(い)ヌ
ルナメリ」ト思ヒテ、行くナルベシ。

I 祖ノ思ヒケル様ニ思ヒテ、

K 祖ハ、「我ガ子必ズ追ヒテ来タルム」ト思ヒケリ。子ハ、「我
ガ祖ハ必ズ追ヒテ前(さき)ニ御(おは)しヌラム」ト思ヒテ、
其レニ不後(おくれじ)ト

L 「今ハ逃げ得ヌ」ト思ヒケレバ、

S 夜ル盗人ヲ射タリケル禄ト思ヒケルニヤ。

II 事情解説(「不々ニシテ」類)

E 頼義ガ未ダ不云出(いひいでぬ)前(さき)ニ、祖ノ云はク、

G 頼義ガ寝タルニ、「此(かか)ル事云ふハ、聞クヤ」ト不告(つ
げず)シテ、

J 祖ニ此(かく)トモ不告(つげず)シテ、

M 事シモ其々(そこそこ)ニ本ヨリ契リタラム様ニ、暗ケレバ頼
義ガ有無(ありなし)モ不知(しらぬ)ニ、頼信、

N 言(こと)モ未ダ不畢(をはらぬに)

O 取りテ来タルムヲモ不待(またず)、

P 此(と)ヤ有リツル、彼(かく)コソ有レ、ト云ふ事モ更ニ不
知シテ、

Q 「希有二馬ヲ不被取(とられざ)ル。吉(よ)ク射タリツル物カ

ナ」ト云フ事、懸(かけ)テモ云ヒ不出(いでず)シテ、

R 宵ニハ然(さ)モ不云(いはざ)リケルニ、

出来事と語り。先の解説は出来事への論評であつて、語りの全体はこ
れとは無縁であることがよく分かるだろう。一話の語りは出来事の一
々に「登場人物の心中思惟」、「事情解説」を加え重ねており、それ
はむしろ「冗筆」と評すべきべきものだった。

語りとは読みと表現を通じた出来事への介入行為である。IのH「ト
思テ、行ナルベシ」、S「ト思ヒケルニヤ」はそれをよく示すが、II
「事情解説」が「不々ニシテ」をもつてなされている点は、これが
「驚き」を伴つて行われていたことを教えている。そしてその驚きは
話末評の次の言葉に集約されることになる。

怪しキ者共心バへ也カシ。兵ノ心バへハ此ク有リケル、トナム語
リ伝ヘタルトヤ。

日本古典集成『今昔物語集二』当該話「怪しき者共の心ばへなりかし」
頭注はこれを次のように評している。

二三—一四話、平致経とその郎等の行動が、無言のうちに一体化
して展開してゆくのを、僧正明尊は実見して、「奇異しく候ひけ
る者かな」という感想を抱く。この場合もそれに近く、武者の倫
理と論理に『今昔』の編者は違和感を抱く。とはいへ、明尊より
遙かに親密な—そして好奇心にも満ちた武者たちへの理解者とし
て、彼はこの奇異な物語を語っている。

「違和感」からの帰結が「奇異(あさまし)」ではなく「怪し(あやし)」
であるところに「親密」(「好奇心」に満ちた「理解」)を読み取っている
わけだが、岩波『古語辞典』は「あやし」の本義を次のごとく説く。

感動詞アヤを形容詞化した語か。自分が解釈し得ず、不思議と感
じる異常なものに心をひかれて、アヤと声を立てたい気持をいう

のが原義。

つまり、「あやし」はいわば了解不能の他者との出会いの局面で発せられる言葉なのである。それは「あさまし」（岩波『古語辞典』「見下げ」の動詞アサミの形容詞形。あまりのことにあきれ、嫌悪し不快になる気持。転じて、驚くようなすばらしきといい、副詞的には甚だしくという程度をあらわす。）のような評価が伴う以前の、「好奇心」に駆られて引き寄せられながらも判断不能のままに距離を措く、そうした姿を映し出す。当該話でいえば、I IIは「好奇心」をもっての了解、判断の試み、話末評はその不能を前にした「アヤ」の声である。

さて、このように見てくると、「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語」は、後世から見ると「兵（つはもの）」の世の到来の前兆とすべき出来事を取り上げながら、それを眼前にして了解に難渋している主体のあり様をこそ伝えていることになる。すなわち、出来事は「中世の幕開け」を時代に先だつて示しているが、語りの地平はなお中古にあることを教えているのである。『今昔物語集』のこうした位相は、「河内山清彦「今昔物語集成立論の一視点—歌集との関連を軸として—」（『国語と国文学』一九六七年一〇月）の「王朝の残響」説、義江彰夫「歴史学から見た『今昔物語集』」（『鑑賞日本の古典3』今昔物語集・梁塵秘抄・閑吟集」所収、一九八〇年）の表象主体「旧体制の担手」説ともよく符合している（小論「院政期文学の研究史と展望（昭和50年以降）説話文学」『解と鑑賞』一九八八年三月、「説話研究の現在」『国文学』一九九五年一〇月、等参照）。

こうして、本話は、やがて保元・平治・治承などの内乱を通じて歴史の表舞台へと登場することになる「兵」台頭の時空において、そこに生を享けた主体が、なお「王朝」文化（言説共同体）に内属しながら「兵」文化（言説共同体）と拮抗し対話する、その「ものを見る」「考

える」営みの具体的個別的な局面をこそ表象（再現前）している。益田勝実『説話文学と絵巻』（一九六〇年）の説話文学論もこの表象性を問題化したものであろう。かかる表象を「伝統的な」言語文化（言語行為アーカイブス）と掴み直し、この対話過程をこそ主題化する教材化、学習指導。ここで提案しているのはそうしたことである。

見てきた「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語」の対話過程は、言語行為主体の世界との向き合い、他者の発見、そこでの宙づり状態の維持（「あやし」に支えられている。これらは新たな公共性（J・ハーバース）、新たな民主主義（A・ネグリ、M・ハート）を協働的に創造し、更新する主体においても、その前段に求められる構えであろう。すぐれたテキストはこれらすべてを常に備えていると愚考するが、ここでの提案は「伝統的な言語文化」にも認められるこの構えに焦点を合わせて「ものを見る」「考える」（＝対話する）主体を育成することをめざす学びの提言でもある。

三 「親しむ」の本義

「親しむ」は新学習指導要領にも引き継がれた古典学習の究極の目標である。しかし、その内実は必ずしも明瞭ではない。いかなる状態をもって「親しむ」状態とするのか。

「親しむ」は「親」の人名訓に「ちか」があるところに明らかのように、関係の近しさをいう語である（岩波『古語辞典』）。したがって「古典に親しむ」とは古典と近い関係になることだが、具体的には身近において折々に繕くような関係をいうのだろう。『徒然草』第13段「ひとり灯の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とすぞ、こよなう慰むわざなれ。」がその原風景だろうか。

「慰む」の共感は、自らにとつては曖昧なままの事象の意味や感

情を「文」がうまく言語化してしているのを発見する時、いつそう強まる。その際、共感(信頼)へと発展するだろう。さらに、「文」が新たな問題を提示していたり、自らの抱える問題への有効なアプローチを開示していたりすれば、信頼は敬意(respect)へと展開するだろう。それは「友人」が「親友」へと変貌する場面ではしばしば体験されることもあるはずだが、あるテキストが読み継がれるなかでもそれは起こっている。異なる状況を生きた読者のそれぞれにそれぞれの共感、信頼、respectを惹き起こしつづけたものが「古典」の称号を得たのであつたらう。

「それ、それ、そういうことなんだよ」「そんなこと考えたことなかったけど、確かにそういう問題はある」「そんなふう考えたことなかったけど、そう考えるといいかも」。こうした体験が「文」との近い関係、つまりは「親しむ」関係を生み出すのではないか。さらに、こうした出会い体験は新たな表現の創造にもつながっている。「こうも言えるよね」「私ならその問題にはこう応えるな」「でもこんなこともあるから、こうも考えられるよね」。いわゆる「伝統的な言語文化」はそのようにして新たに産出されつづけたはずだ。とすれば、かかる「親しむ」の本義に即した教材化、共感、信頼、respectを醸成する出会い方を構想する学習指導、あるいはテキストに実現されているそうした出会い(本歌取り、本説取り、物語の引用、など)との出会い場面の教材化、学習指導もあつてよいように思うがいかがだろう。

respect 醸成の起点は「それ、それ、そういうことなんだよ」、「そんなこと考えたことなかったけど、確かにそういう問題はある」、「そんなふう考えたことなかったけど、そう考えるといいかも」といっ

た声にある。したがって学習指導は、テキストの表現(「それ」、取り上げられた「問題」領域(「そんなこと」)、「問題」領域をめぐるテキスト内の対話(「そんなふう」)の)具体を精確に読解し理解するところから始められなくてはならない。そしてそこからテキストに応答すること(「こうも言えるよね」「私ならその問題にはこう応えるな」)、テキストと対話すること(でもこんなこともあるから、こうも考えられるよね)。その間に醸成される respect(それが関係の近しさ(古語「なつかし」の状態)を育み、「生涯にわたって古典に親しむ」態度の形成をも準備していくだろう、というのがここでの提案の趣旨である。詳細は「古典の読解力」(学校図書・中学校国語指導シリーズ『充実した読解力養成のために』(二〇一一年二月)に記したので、以下は具体的な事例を示すに止めたい。ただし、ここでいう respect は学習者自身が主体的にテキストに見出だしていくものであつて、古典の聖(正)典(カノン)化のなかでア・プリオリに要請されるそれと別物であることだけはあらためて強調しておきたい。

① 「それ、それ、そういうことなんだよ」↓「こうも言えるよね」

うれしさを昔は袖につつまけり

今宵は身にもあまりぬるかな

『和漢朗詠集』・下・慶賀・七七二・作者未詳)

この歌が取り上げている「問題」の領域は「友の喜(慶)びを喜ぶ思い」である。この「思い」は友情にかかわって学習者には体験済みのものだろうが、それをどう相手に伝えるかは誰にとつても悩ましい。これを言いあてた表現と出会った時に発せられるのが「それ、それ、そういうことなんだよ」の声である。「うれしさを」歌はこの要件を充たしている。その達成を了解するためには、中村明『(日本語)語感の辞典』「まえがき」を補助教材として用いるのがふさわしかろう(発

表では「表現選択の諸レベル」項の「自分の伝えたい意味合いを正確に表すのにもっとも適切な表現を探そう。」以下を引いたが、ここでは紙幅の都合上「うれしさ」にかかわる部分だけを示す。

表現したい何かをはじめから明確なことばの形で存在することはめったにない。ほのぼのとした感情が胸に広がるとしよう。「うれしい」ということばしか頭に浮かばない人はためらわずにそう書く。「楽しい」ということばも頭に浮かぶ人はどちらが適切かを考え、好ましいことが起こったのを知った瞬間に始まる喜びであれば「うれしい」を選び、実際の行動をとおして継続的に感じる満ち足りた快さであれば「楽しい」を選ぶはずだ。ある人はさらに「喜ばしい」「愉快だ」「痛快だ」といったことばを含めた中から最適の一語を探さるう。同じ「喜び」であっても、その多様なあり方を「わく」「みなぎる」「こみあげる」「ほとばしる」と描き分ける。

「好ましいことが起こったのを知った瞬間に始まる喜び」を表す語として本詠詠者は「うれしさ」を選び、「その多様なあり方を」「描き分ける」ために「袖につつみ」と対照させた「身にもあまりぬる」を留意した。「あまる」は「物事の分量や程度が一定の枠の中におさまりきらず、外にはみ出る意。多く、処理に困る場合に使う。」(岩波『古語辞典』)語だった。本詠の表現に共感して「それ、それ、そういうことなんだよ」の声をあげ、これを踏まえた歌詠におよぶ例は藤原定家や藤原家隆など数多い。次の慈円詠もその一例である(『続千載和歌集』卷一七・雑歌中・一八五三、『拾玉集』三八八五)。

うれしさをつつみならひし袖にまたその身にあまるけふとこそみ
れ

中村明氏は先の引用につづけて次のようにいう。

ことばを選び、表現を練るのは、ことばをいじりまわすことではない。文章を飾って知識をひけらかすためでもない。表現しようとする対象のひだに分け入り、実際のイメージに接近しようとする努力なのだ。とすれば、人間がことばを選ぶとき、その奥にある表現すべき対象や現実のとらえ方も同時に選んでいることになる。ものの見方や考え方をはつきりさせ、何を対象にどの面をどう描くかという選択をとおして、その人自身が姿を現すのである。そういう人間の行動の反映として、表現は豊かな広がりを見せるのだから。

「読む」から「書く」「話す・聞く」へと展開する学習の「こころも言えるよね」活動は、「ことばを選び、表現を練るのは、ことばをいじりまわすことではない。」との理解に立つて行うのがのぞましい。そしてそこでの活動が言葉との格闘となる時、「表現」との出会いはこのことばを選び、表現を練る「営み」との出会いとなり、さらにそうした「表現すべき対象や現実」と対話を重ねた「古人」との出会いにも展開していくだろう。respectの局面はそれらにもある。

②「そんなこと考えたことなかったけど、確かにそういう」とはある
↓「私なら、それにはこう応えるな」

この声を聞くためには、目の前の学習者の発達段階や知識、体験、心的経験に応じた「問題」の選択が必要である。また、学習者にとつて意味のある「問題」が精確な読解を通して自ずから見出されるテキストであるかどうかの見極めも欠かせない。ここでは中学校教科書に採録の教材がすでに扱っている「問題」領域(『平家物語』↓「無常」「死」、中学校教科書採録教材から取り出せる「問題」領域(「自己/他者」↑『枕草子』)をそれぞれ提案しておく。

*「無常」「死」(和漢朗詠集・下・無常・七八九・宋之間「有所思」)

年年歳歳花相似たり (年年歳歳花相似)

歳歳年年人同じからず (歳歳年年人不同)

対句仕立ての「花」(相似)／「人」(不同)の対比は、学習者の知識、体験との関連づけを通じて自ずから宋之問との「問題」の共有を導き(「そんなこと(問題として)考えたことなかったけど、確かにそういうことはある」)、テキストを介した心的経験の場を開くだろう。そして、開かれた場は自ずから「無常」「死」をめぐる思索を促して応答の声(「私なら、それにはこう応えるな」)を生むだろう。生をめぐる知のフィールドの拡張。その実感こそが respect 醸成の契機である。本教材はその契機を内包している。

* 「自己／他者」『枕草子』「九月ばかり」段

九月ばかり、夜一夜降りあかしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとげざやかにさし出でたるに、前栽の露こぼるばかりぬれかかりたるも、いとをかし。透垣の羅文、軒の上に、かいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふとかみさまへあがりたるも、いみじうをかし、といひたることどもの、人の心にはつゆをかしからじとおもふこそ、またをかしけれ。

『枕草子』は清少納言の才女ぶり、観察眼の鋭さを読み取って終えてよいテキストではない。「清少納言」の名に血を通わせるためには言葉が姿を表す局面での知の働きのあり様、すなわち言述の様態に迫ることが必要だ。傍線部はその様態をあらわに示す箇所。発話の利那に立ち上る他者の声(他者のもつ情報、他者において慣習化された知と言葉)への配慮。その反作用としての自己の声への省察。そして清女は

共感を見ぬ世の読者に託す。彼女が書きながら開いているのは「自己／他者」にかかわる「問題」。これもまた、他者への配慮と自己省察を繰り返しているはずの学習者の体験と結びつけば、「問題」が共有され(「そんなこと(問題として)考えたことなかったけど、確かにそういうことはある」)、体験の対象化、意味づけ、整理がそこで進み、思索が深められ、テキストを介した心的経験からの応答の声を生む。ここで開かれるのは個我をめぐる知のフィールド。そうした知の発展の確認もまた respect 発現の契機である。

③ 「そんなふう」に考えたことなかったけど、そう考えるといいかも」
↓「でもこんなこともあるから、こうも考えられるよ」

ここでの声は「ものの見方や考え方」にかかわる。ある「問題」をめぐる学習者の対話の作法がテキスト内で展開される対話との出会いを通じて修正更新される局面、そこで発せられるのがこの声である。これも respect へとつながる途だろう。ここでは「祈り」と「男／女」の「問題」をめぐる新たな知を拓くと目される対話例を紹介する。

* 「祈り」↑「目にも見えぬ仏、神」(『源氏物語』明石巻)

親たち(明石入道夫妻)は、こころの年ごろの祈りの叶ふべきを思ひながら、「ゆくりかに見せたてまつりて、(光源氏ガ娘ヲ)思し数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむ」と思ひやるに、ゆゆしくて、「めでたき人と聞こゆとも、(ソウナルト)つらういみじうもあるべきかな。目にも見えぬ仏、神を頼みたてまつりて、人の御心をも、(娘ノ)宿世をも知らで」など、うち返し思ひ乱れたり。

明石に移った光源氏が明石君の岡部の宿を訪れる直前、源氏の到来を仏神への祈りの功德かと喜んでいた入道夫婦が娘の将来を案ずる場面である。親にとつてのあらまほしき未来と娘が体験することになる現

実と。その乖離、齟齬を想うとき、親たちの年来の「祈り」は宙づりになり、仏神は目に見える現実のなかで「目にも見えぬ仏神」として相対化されてしまう。これが紫式部がテキスト内で展開する対話。学習者の「祈り」をめぐる思惟の作法がそこで相対化され、さらにこれとは異なる「祈り」観を参与させて「問題」の領域にかかわる対話が活性化すれば、その心的経験が respect の土壌を耕やすことになる。

* 「男／女」↑「性愛なき関係」(『竹取物語』の帝とかぐや姫、『源氏物語』の光源氏と玉鬘)

これについては後藤祥子氏の次の発言を引いておけば事足りるだろう(共同討論「玉鬘十帖を読む」『国文学』一九八七年一月)。

ところで、源氏が訴える恋情とは一体何なのか。親権者と懸想人のはざまを往復して行き着いた境地は、周囲が憶測している妻妾的あり方とはかなり違っているらしく、玉鬘自身は誰よりも早く、源氏のこの奇妙な求愛の性質をかぎあてています。玉鬘論でよく引かれる部分ですが、「常夏」巻にこんな文章が出てきます。

姫君も、はじめこそむくつけくうたてとも思ひたまひしか、かくてもなだらかにうしろめたき御心はあらざりけりと、やうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず

こうした源氏と玉鬘との関係は竹取における姫と帝との潔い間柄とはやや異質であるにしても、女が「うとみきこえず」としているのは注意すべきだと思われます。安住すべきではない土地に身を置きながら、いつしか憎からぬ人間関係を結び、しかもそれが、現世的な夫婦関係や愛欲とはいささか次元の違うところでとり結ばれている、六条院の「この世のものならなさ」の本質は、そういうところで竹取と繋がって来るのではないか。実は最近拝見した高橋和夫氏の玉鬘論(『源氏物語の探究』十二輯)で、斎藤暁子氏

の論(『同』八輯)の、特にそこを絶賛してらして、あらためて、はつと思つたのですが、「見あやうそうに見えて、その実、潔さを実証することのできたこの二人の関係というものは、俗物の世界から見るとまことに稀有だというのですね。そんな価値観を実感できたのは、源氏の前にはこの竹取の帝だけではないか。もとより、竹取のほうでは女主人公が異界の価値観で強引に押し通しているところを、この物語では源氏が大いに迷い悩みながらやり抜いたといえるものですが、ともあれ、その超俗性において源氏は竹取を承けていたのではないか。

これは玉鬘物語の源氏・玉鬘との関係に「竹取物語取り」を指摘する文脈に見えるもの。共同討議に参加していた秋山虔氏は、これを承けて、「実現しないことにおいて二人の関係が全く麗しい恋愛関係になった」、「結ばれてしまったら地獄であるにちがいないのですが、そうならなかったことにおいて二人のうるわしい関係が出来あがっている」ということで、そうすると竹取とのみごとな相似形が出てくる」と述べている。『竹取物語』の帝とかぐや姫、光源氏と玉鬘の性愛なき「男／女」関係。このテキスト内対話の聴き取りを是とすれば、これとの出会いは、右の共同討議の参加者がそうであったように、学習者の「男／女」観を拡張し、「問題」をめぐる対話を深め、その拡張と深化の間の心的経験を通じたテキストへの、古典への respect を育んでいくことになる(小論「翁の物語としての『竹取物語』」『古典に親しむ』ために「『国語教育研究』45、二〇〇二年、参照)。

* 「男／女」↑「心の不倫」(『源氏物語』濛標巻)

(明石君ノ姫君出産ヲ光源氏カラ告ゲラレ、紫上ハシバシ恨ミノ情ヲ抱クモノノ)年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし(光・紫ノ)御心のうちども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、(紫上)『よ

ろづのこと、(光源氏ニトツテハ)すさびにこそあれ』と思ひ(恨みノ情ハ)消たれたまふ。(光源氏)「この人(明石君)を、かうまで思ひやり言(こと)問ふは、なほ思ふやうのはべるぞ。まだきに聞こえば、またひが心得たまふべければ」とのたまひさして、(光源氏)「(明石君ノ)人がらのをかしかりしも、所からにや、めづらしうおほえきかし」など語りきこえたまふ。(明石君ノ)別レノ折ノ)あはれなりし夕べの煙、言ひしこと(光源氏)「このたびは立ちわかるとも薬塩やく煙は同じかたになびかむ」明石「かきつめて海人のたく薬の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ」など、まほならねど、その夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、(紫上)『われはまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても、心を分けたまひけむよ』と、ただならず、思ひ続けたまひて、『われは、われ』と、うち背き眺めて、「(以前ハ)あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて、

「思ふどちなびく方にはあらずとも われぞ煙に先立ちなまし」紫上の不興を前に自らの政治的思惑(明石姫君の入内)をほのめかして言いつくろう光源氏は、明石君の「人がら」を語るうちに懐旧の世界に浸り込む(波線部)。それを目の当たりにして、紫上は、「すさび」と自らに言い聞かせて収めた不信感(前半傍線部)を、「すさびにても、心を分けたまひけむよ」と再び募らせて絶望する(後半傍線部)。ここでテキストが行っている対話は「男/女」関係にままある「不倫(すさび=遊び)」の「問題」をめぐる、「身体の不倫」と「心の不倫」との事分けである。この思惟は一夫多妻の常態化した古典世界における倫理観を窺わせて興味深い、さらに進んで人間関係の根幹を支えるものとしての「心」への洞察が含まれている点で意義深い。こうした

洞察との出会いもまた、私たちと同様の困難を生きつつ世界との対話を重ね省察を深めた古人の生を實在感をもって確かめさせ、私たちを respect に裏打ちされたテキストとの対話(二)でもこんなこともあるから、こども考えられるよ)へと導くであろう。

*

音読、語記・暗唱、朗読は「古典に親しむ」ために必要なことだ。しかし、それはおそらく教室のなかでの「親しみ」にとどまる。古典が教室の外の学習者の日常で、そして生涯にわたる生の営みのなかで慕わしいものであるためには、知の領域に作用する出会い体験とそれを通じた respect の醸成が欠かせない。そのことは古典研究者となつた者のすべてが経験しているはずのことで、それによつても有効性は明らかだ。「それ、それ、そういうことなんだよ」、「そんなこと考えたことなかったけど、確かにそういう問題はある」、「そんなふうに代文(詩歌・評論・小説、等)学習の場で、さらには他教科の教室ですでに求められ、現代文にまたそれぞれの教科に「親しむ」学習者から聞かれる声だろう。古典学習指導においてもこれを構想し実現することはできないか。ここで提案しているのはそうしたことである。

おわりに

小・中・高における展開は4↓3↓2の順となるはずだ。その各段階で「批評」場面も仕組まれてよい。

「4↓3↓2」とあるのは、本稿の「三「親しむ」の本義」↓「二「言語文化」」↓「一「伝統」」に対応する。ただし、「三「親しむ」の本義」で取り上げた事例は①↓②↓③の順で小中高での学習を想定

している。発達段階に応じた respect の醸成を図りつつ、「言語文化」を世界との対話のアーカイブスと捉え返し、流通する言説と対峙しながら新たな言説の創造と（持続的な）更新に挑む創造的な言語営為を確認するとともに（中学校・高等学校）、他方、そうした個別的な営みの所産が「伝統」に絡め取られたり「伝統」を詐称したりする風景を視野に収めること（高等学校）。これがここで提案している古典学習カリキュラムだが、それは人間と社会と言葉との力動的関係についての認識を深めるものとして、「言葉の学び」を標榜する国語科の学習にいかにもふさわしいことのように思われる。

こうした提案を試みるのは、教養主義的な古典学習からの脱却が必ずやと考えるからである。

『学校教育法』は高等学校の教育の目的（第50条）を達成するための「目標」として、第51条に「三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」を掲げている。この文言に一九九〇年代以降の欧米諸国や国際連合での議論、すなわち citizenship education（市民教育、市民性の教育）「各自がシテイズン（市民）として活動し、全体の決定にかかわることを通じて政治的共同体を支えていく、という動的な意味がこもっている」語。荻部直『移りゆく「教養」』（二〇〇七年）についての提言との関わりを読み取るとすれば、ここでは「社会の発展に寄与する態度」をそなえた「市民」の要件に「個性の確立」と「社会についての」広く深い理解と健全な批判力」が教え上げられていることになる。後者は、荻部著書にいう「民主主義」の実践」のための「政治的教養」（三木清「教養論」（原題「教養論の現実的意義」）一九三七年、南原繁「新日本の建設」（一九四五年））にほぼ等しい。荻部は、シテイズン・シップ教育の議論を紹介するなかで、マーサ・C・ヌスバウム『人間の教養』（一

九九七年）が説く、「世界市民」育成のなかで育てられるべき三能力「を取り上げているが、その一つ目は「自分と自分が育った伝統との双方を、むしろ批判者の目で吟味する能力」である。また荻部は、「読書」をめぐるでも、福田恒存『私の幸福論（原題『幸福への手帖』）』（一九五六年）を引いたのち、

本を読む過程は、「精神上の力くらべ」ということになる。したがってそれには時間がかかる。早く読み飛ばしてしまえば、著者の主張を鵜呑みにするか、あるいは浅薄な反撥を覚えるだけで、終わってしまう。そうではなく、思いこみを排しながらテキストの内容を言葉どおりに理解したうえで、それを自分自身の「思想や生き方」とつきあわせてゆくこと。そうした「対話」を続けることが重要なのである。／こうして見ると、一冊の本をじっくり読む作業が、そのまま、日常生活において複雑な状況にむきあい、それに対処する方法の、予備訓練になることがわかるだろう。

とまとめている。「市民」としての、あるいは「世界市民」としての、さらには「（帝国）の時代の新しい民主主義」の担い手「マルチチユード」（A・ネグリ&M・ハート『マルチチユード』（帝国）時代の戦争と民主主義』（二〇〇四年）の要件としての「政治的教養」の形成には、「批判者の目で吟味する能力」「対話」を続けること」が欠かせない。そして、ヌスバウムの言うように、そこでは「社会」だけではなく、「自分と自分が育った伝統との双方」も対象とされることになる。「伝統的な言語文化」の学習の目標を、「愛国心」にかかわる教養の形成ではなく、そうしたかたちで形作られていく民族的教養（言説共同体）そのものを「批判者の目で吟味」し「対話」し続ける「政治的教養」の形成へと摺み直すこと。教養主義的な古典学習からの脱却の必

要性とはこのような議論を承けてのことであり、また本稿の提案もこれに与してのことだが、『学校教育法』の目標が古典学習においても達成されるためにはこうした掴み直しを求められることになる。

「批判者の目で吟味する能力」「対話」を続けること」は、新『学習指導要領』にいう「熟考・評価」にかかわり、その方法としてのクリティカル・リーディング（文章に対する自分の考えを持って読む批判的な読み）。秋田喜代美「テキストからの学習」『授業研究と学習過程』所収（二〇一〇年）そのものでもある。これを「吟味」の後の共感、「対話」を通じた協調、さらには対峙しながらの判断留保をも含めて広く「批評」と言い換えれば、これこそが「政治的教養」の実践ということになる。それは古典学習の場というばかりではなく、古典研究の場の課題でもある。教養主義に支えられた古典研究から「政治的教養」のもとで「批評」する古典研究へ。その時、研究の場と教育の場とは連携の回路を手に入れることになる。すでに述べたように、こうした「批評」は言語をもって世界と対話する古典テキストとその享受の場においても実践されていたことだった。それらのテキストはそのようにして「古典」となったのである。「伝統的な言語文化」を「ものを見る」「考える」営みのフィールド、心的経験を耕しつづけた場として掴み直し、そこに「古典」を差し戻すこと。そして個々のテキストにひら（開／拓）かれている「問題」領域を見定め、共有し、テキスト内の対話に参加し、私たちの（いま・ここ）と往還しつつ応答し、「政治的教養」にむけて／のもとで「批評」すること。道は遠そうだが、古典をめぐる研究と教育との両者がともに現代において意味をもつためには、日が暮れぬ前に歩き始め、少しずつでも歩を進めたほうがよいように思うがだろうか。

* 本稿の基礎となった既発表著書・論文は以下の通り。

- 1 『言述論』『説話集論』（笠間書院、二〇〇三年五月）
- 2 「古典」教材・和歌「百人一首」（『高等学校における教科指導研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇四年三月）
- 3 「説話『今昔物語集』『保昌と袴垂』の教材研究（『中等教育における教科内容指導研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇五年三月）
- 4 「詩教材としての和歌」（『中等教育における教科内容の開発とその指導に関する研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇六年三月）
- 5 「古典学習論―親しむから考える―への展開のために」（『中等教育における教科教育内容とその指導に関する研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇七年三月）
- 6 「古文学習論―読解力」育成に向けた5段階学習―」（『中等教育における教科教育内容の開発とその指導に関する研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇八年三月、所収）
- 7 「古文学習論―読解力」育成に向けた5段階学習（2）―」（『中等教育における教科教育内容に関する研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇〇九年三月、所収）
- 8 「古文学習論（3）―伝統的な言語文化」学習にむけた教材案、ならびに『学習指導要領』術語集―」（『中等教育における教科教育内容に関する研究』広島大学大学院教育学研究科、二〇一〇年三月、所収）
- 9 「古典の読解力」（中学校国語指導シリーズ『充実した読解力養成のために』二〇一一年二月、所収）
- 10 『中学校国語―教師用指導書1〜3』（学校図書、二〇〇六年二月）

（広島大学）